

「相中相高百年史」より (戦時体制下の相馬中学校 16)

10 学徒動員：三年生（相中第45・46期生等）・・・ペンをハンマーに
《 横浜・海軍航空技術廠支廠へ出動 》

(6) 九死に一生を得て (その1)

ここでは、生駒浩^(※1)の体験談を記して見よう。

彼が射撃部の二科に配属されて、まもなく、大木常和^(※2)・佐藤(旧姓宗像)政^(※3)・齋藤定助^(※4)・繁田開作・早川和夫^(※5)・阿部(旧姓伏見)宗雄^(※6)・太田信^(※7)・門馬一彦^(※8)・立谷榮(あきら)^(※9)・齋藤彰^(※10)(途中から他の科へ)・佐藤正男^(※11)(海兵予科へ)等十二名は突如平塚分所への疎開を命ぜられた。

1945(昭20)年1月17日皆と別れて、逗子駅から、鎌倉、北鎌倉、大船を経由して平塚に移ったときの、一抹の淋しさを隠すことはできなかった。仕事場は、松林と桃畑に囲まれて砂地にたっている平塚工業学校の校舎の一部が当てられていた。

仕事の内容は「弾道角修正計算」というもので、一人一人机を預けられ、タイガー計算機と七桁対数表が与えられた。毎日、日勤勤務で、来る日も来る日も計算機でカチャカチャチーンと音を立てながら、コンマ以下の細かい数値を計算用紙に記入して提出する。それが主な仕事であった。

学生は我々十名だけで、他の工具達に比べ、二倍から三倍の仕事ができた。それで、当時の技術大尉や職長の方々より褒められたり、また驚異の目で見られていた。宿直も度々あって、このときは、室内運動場の卓球台で、夜寝るのも忘れて思う存分卓球を楽しみ、心地好い汗を流したものである。

爆撃機B29の空爆は日増しに激しさを増し、被害は全国の都市に及んでいた。

「東部軍管区情報、B29〇〇機は、房総半島(ときには伊豆半島)南海上〇〇附近を北上中……」の放送があるや否や、空襲警報のサイレンがけたたましく鳴って、一斉に防空壕に退避。平塚の山岳地帯には高射砲陣地があったため、米軍の艦上戦闘機P51(ムスタング)やグラマンが超低空で機銃掃射をしてきた。これを迎え撃つ日本空軍の雷電戦闘機との戦いは壮絶を極めた。

B29の焼夷弾投下により東京・横浜などの大都市がすっかり焼け野ヶ原となり、空襲は周辺の中小都市にまで及んだ。平塚空襲は1945(昭20)年7月16日夜半。B29百三十機による焼夷弾投下があった。その日我々相馬中学生五名は宿直で、皆が帰ったあと、21時に庁舎巡回を終わり、当直将校に「異常なし」と報告。五人で卓球をやった後、床についてまもなくのサイレンであった。

空襲警報のサイレンを追いかけるように小田原方面から火の手が上がり、見る見るうちに夜空を真っ赤な炎で染めたとしたら、たちまち平塚、茅ヶ崎、辻堂まで東海道沿線都市は野火の広まるごとく火の海となってしまった。

「ザー」

という雨の降るような音と共に、バラバラと落とされる焼夷弾。猛烈な炎で焼き尽くすさまは、まさに地獄絵さながら。何百人、否何千人の平塚市民が逃げ場を失い、自分の家や商店街から、海岸の砂地や桃畑に避難するしか行き場がなくなった。皆が逃げ行く先にもB29の焼夷弾は情け容赦なく落とされ、雨あられのようだった。

平塚工業学校の別棟には、膨大な非常食糧(缶詰類)が保管されていた。我々は燃え盛る炎の中、校舎の窓ガラスを叩き割って持ち出すよう指示された。しかし、あまりの熱で、缶詰は

「ボン……、ボン……、」

と大きな不気味な音を発しながら、次々に天空高く舞い上がるのであった。我々は危険をおかしながら少しでも多くの缶詰を運び出そうとした。必死だった。その時、急に頭上で

「ザー」

という音が聞こえてきたので、もう限界だと思い桃畑に近づくと、誰かが

「危ない！伏せろ！」

と叫んだ。私は咄嗟に箱を投げだし、地面の砂地に、両手で眼と耳をふさぎながら伏せた。その途端、目の前で、

「ドスン」

という地響きがして、頭から砂をドサッと被せられた。体が埋まるほどであった。

「やられた」

と観念した。するとどうだろう。目の前に落下した焼夷弾の黒い束は、砂地に大きな穴を開けてめり込んだままではないか。全然爆発しない。

「シーン」

として不気味であった。反射的に私はパツ！と跳ね起きて、全身に砂をかぶったまま全速力でその場から逃げた。朝になって分かったのだが、この焼夷弾群は、空中で分解するはずの仕掛け（装置）が働かず、束になったまま落下し、しかもその束全体が不発弾だったのだ。我々は何ともいいようのない幸運に恵まれ、九死に一生を得たのである。

翌日東の空が白む頃、我々は全員無事であることを確かめあい、

「よくぞ命だけは助かったなあー」

と互いに喜びあった。寮も学校（工場）も防空壕も、すべて焼夷弾で焼きつくされていた。焼け出された我々に、弾道角計算の女子職員が何人か赤飯のお握りを持って見舞いにきてくれた。我々は、餓鬼のようにむしゃぶりついた。後で聞いたらそれは高粱（こうりゃん）であったとか。でも、彼女たちの心優しさは本当に嬉しかった。布団も教科書も参考書も皆焼けてしまい、我々一行十名は一旦相馬に帰されることになった。

その夜、常磐線の列車に乗って相馬へ向かうことになった。列車は超満員で、我々はトイレ脇の車掌室の窓から押し込まれるように乗り込んだ。ところが夜半、日立駅の手前にきたら列車はストップして全然動かない。それもそのはず、その時刻、日立市は敵の猛烈な艦砲射撃で火の海であったのだ。数時間たって、ようやく列車は炎に包まれた日立市内を通過し、かろうじて相馬に辿り着くことができた。

相馬に滞在すること一週間。原隊復帰の命令がでたので、再び横浜の仲間と合流、射撃部に配属された。それから半月後、八月十五日の終戦を迎えたのである。

(※1)・(※2)・(※3)・(※4)・(※9) 中第46回 昭和22年卒 中村出身

(※5)・(※7) 中第46回 昭和22年卒 原町出身

(※6)・(※11) 中第45回 昭和21年卒 高平出身

(※8) 中第46回 昭和22年卒 小高出身

(※10) 中第45回 昭和21年卒 中村出身